

平成16年7月6日(火)

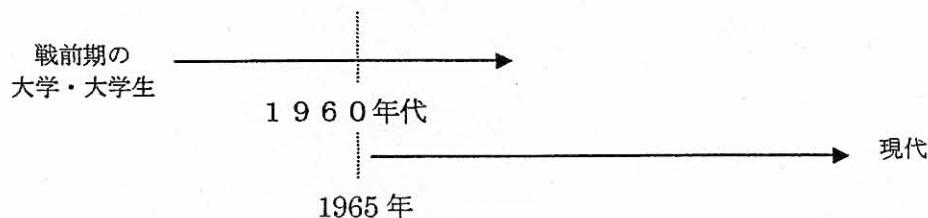
## 本日の授業

### — 1970～1980年代の若者文化の隆盛 —

溝上 慎一 (高等教育研究開発推進センター助教授)

#### 1. 本日の授業:

##### (1) 「1960年代」という時代－大人社会の「前文脈」の力－



- ・樋口一葉『たけくらべ』: <資料1>

##### (2) 戦後の就業構造変化－1950～1970年代－

- ・専業・兼業別農業人口の推移

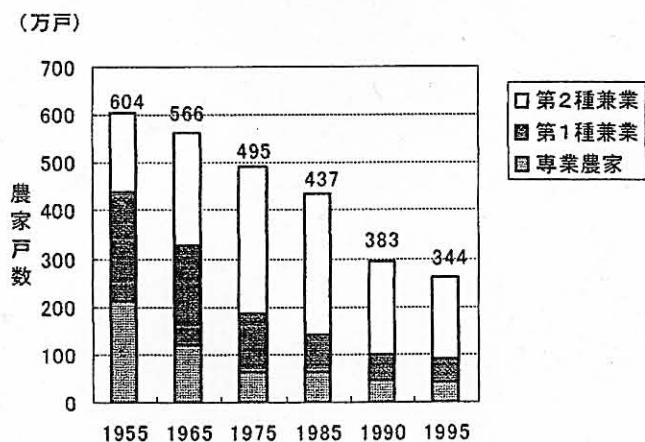


図1 農家戸数の推移と販売農家の割合

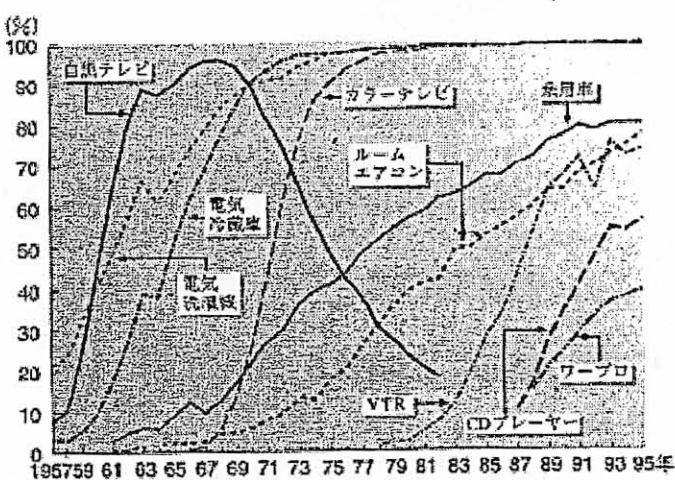
(注) 経済企画庁調査局編『経済要覧(平成11年版)』より作成。

・産業就業構造の変化（表1）

	1930	1940	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995
農業	46.8	41.5	45.2	38.2	30.0	22.8	17.8	12.6	9.8	8.3	6.4	5.3
林業・狩猟業	0.6	0.9	1.2	1.3	1.0	0.6	0.4	0.4	0.3	0.2	0.2	0.1
漁業・水産業	1.9	1.7	1.9	1.8	1.5	1.3	1.1	0.9	0.8	0.7	0.6	0.5
鉱業	1.1	1.8	1.7	1.4	1.2	0.7	0.4	0.3	0.2	0.2	0.1	0.1
建設業	3.3	3.0	4.3	4.6	6.1	7.1	7.7	8.9	9.6	9.0	9.5	10.3
製造業	16.0	21.2	16.0	17.8	21.8	24.2	25.8	24.9	23.7	23.9	23.7	21.1
卸・小売業	14.0	12.7	11.1	13.8	15.8	17.9	19.2	21.3	22.8	22.9	22.4	22.8
金融保険・不動産業	0.7	0.9	1.0	1.6	1.8	2.4	2.7	3.4	3.6	3.8	4.3	4.2
運輸通信・公益事業	4.4	4.7	5.1	5.2	5.6	6.6	6.8	6.9	6.9	6.6	6.5	6.6
サービス業	8.4	9.0	8.6	11.2	11.9	13.2	14.7	16.4	18.4	20.5	22.5	24.8
公務	2.5	1.9	3.9	3.4	3.0	3.1	3.3	3.7	3.6	3.5	3.3	3.4
その他	0.2	0.7	0.1	0.0	0.3	0.1	0.1	0.3	0.3	0.4	0.5	0.8
第一次産業	49.3	44.1	48.3	41.2	32.6	24.6	19.3	13.9	10.9	9.3	7.1	6.0
第二次産業	20.4	26.0	21.9	23.8	29.2	32.0	33.9	34.1	33.6	33.1	33.3	31.6
第三次産業	30.2	29.9	29.8	35.0	38.2	43.3	46.7	51.7	55.4	57.3	59.0	61.8
就業者総数	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

(注) 経済企画庁調査局編『経済要覧(平成11年版)』pp.84-85、経済企画庁調査局編『経済要覧(1958年)』pp.223より作成。

・耐久消費財の普及率：



(出所) 経済企画庁編『家計消費の動向』、同調査局編『消費動向調査年報』の各年版。  
1969年以降については、同調査局編『消費と好惡の変遷—消費動向と調査法の  
結果と分析』を参照。

・1950年代後半「三種の神器」…

白黒テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫

・1960年代後半「3C」…

車・クーラー・カラーテレビ

・消費革命

【出典】橋本・長谷川・宮島(1998)、図

10-1より

### (3) 若者文化の隆盛

- ・1950年代後半若者（消費）文化：

— 英文学者・中野好夫「もはや戦後ではない」  
（『文藝春秋』1956年2月号）  
→『経済白書 1956年版』

- ・プレ団塊世代（1950年代後半） > 岩間（1995）

石原慎太郎『太陽の季節』（1955年、芥川賞）⇒「太陽族」

ロカビリー=ロック&ヒルビリー

上2つ、ともに溝上（2004）p.94

- ・団塊世代（1960年代後半にハイティーン）

- ・団塊第二世代（1970年代） = 「原新人類文化」「シラケ世代」 by 岩間（1995）
    - 1969年 庄司薰『赤頭巾ちゃん気をつけて』…芥川賞受賞
    - 團塊第一世代と少し距離を取る。「連帯感」「共同志向性」の希薄
    - 戦後世代ではあるが、戦後の復興期に育つ。かつ、団塊世代のできあがった若者文化のもとでハイティーンを迎える。
    - マンガ：1970年代初頭「乙女ちっくカルチャー」…陸奥A子『桜の木陰でお昼寝すれば』『たそがれ時に見つけたの』、田淵由美子『フランス窓だより』『林檎ものがたり』など
    - 音楽：アイドル歌謡…新三人娘（天地真理、南沙織、小柳ルミ子）
      - >かぐや姫「神田川」 vs. 旧世代、大人世代
    - 雑誌：ファッション、インテリア、旅行などの雑誌（『an an』『non non』）
    - ファッション：「マンション・メーカー」（小規模なアパレル企業）「テナントビル」
      - ↓ 対抗文化の衰退
- 「ちょっと距離を取る」が裏目に出る
- ・大プレート・小プレート：

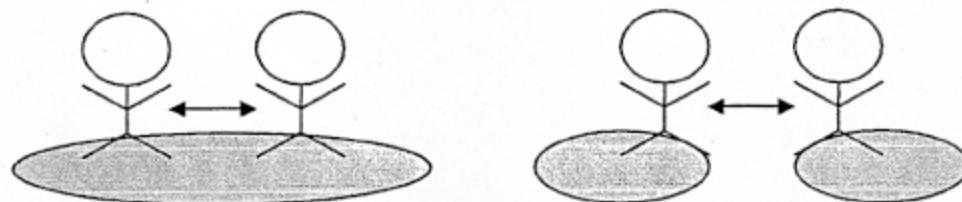


図 大プレート（左）・小プレート（右）における人間関係

- ・新人類文化（1980年代）：
  - 田中康夫『なんとなく、クリスタル』（雑誌『文藝』1980年12月号）…文芸賞受賞

## 一 新人類

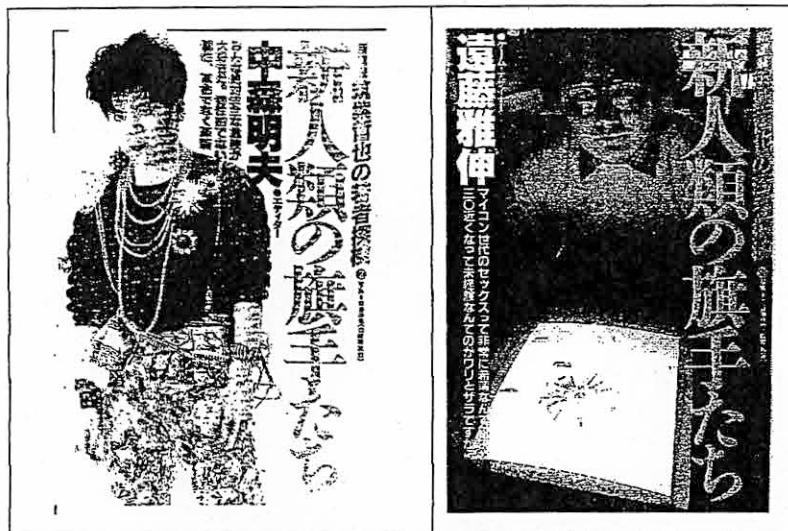


図2-9 筑紫哲也の若者探検「新人類の旗手たち」

(注1) 新連載「新人類の旗手たち」(1985年)の第1号、第2号を飾ったのは遠藤雅伸(ゲーム・デザイナー)、中森明夫(エディター)だった。

(注2) 左は『朝日ジャーナル』(1985年4月19日号、51頁)、右は同(1985年4月26日号、51頁)



浅田彰『構造と力』勁草書房  
ニュー・アカ・ブーム

筑紫哲也編『若者たちの神々  
Part1』(1984年)

## 2. 参考文献

- 橋本寿朗・長谷川信・宮島英昭 1998 現代日本経済. 有斐閣アルマ.
- 岩間夏樹 1995 戦後若者文化の光芒. 日本経済新聞社.
- 馬渕公介 1989 「族」たちの戦後史. 三省堂.
- 溝上慎一 2004 現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる—. NHKブックス.
- 村瀬学 1999 13歳論—子どもと大人の「境界」はどこにあるのか—. 洋泉社.

## <資料1> 村瀬学『13歳論』

### 3「二股を掛ける」ことへの目覚め——『たけくらべ』

人生のいつからか、自分とよその子を「くらべ」はじめる年頃がある。自分がよその子とどこか違う。どこが違うのかよくはわからない。しかし薄々ながら感じはじめる。あの子と自分は違うんだ。『たけくらべ』はまさに、こういう「くらべ」をはじめた子どもたちの物語である。

『たけくらべ』には「13歳」から「16歳」までのいわゆる「子どもたち」が登場する。物語となる『たけくらべ』の舞台は、吉原遊郭をかかる町である。「風俗の仕事」と「堅気の仕事」が混在する町。さらにこの町には二つの学校がある。裕福な子の通う「公立の学校」とそうでない子の通う「私立の学校」と。この舞台設定だけでも、すでにこの町に暮らす子どもたちが、早くから多層な世間に気づかざるを得ないところで生きている様子がうかがえる。

物語は夏祭りの「喧嘩」ではじまり、秋祭りの「別れ」で終わる。話の流れからすると夏祭りの「喧嘩」は、いわば少年時代の「エピソード」のようなものである。が、しかし「この物語」の最初になぜ「喧嘩」がとりあげられたのかは「エピソード」ではすまされないものがある。今回はこの「喧嘩」に焦点を当てて考えてみたい。

この町の子どもたちの間には「表組」と「横町組」の二つの組がある。といつても「横町組」のほうは、「鳶の頭の息子(16歳)」が以前勝手に名づけてつくった組である。夏祭りの喧嘩は、この横町組が表組になぐり込みをかける形で展開する。物語をなぞるのは野暮であるが、この「なぐり込み」が、ある意味では「赤穂四十七士の討ち入り」のようなニュアンスを持っていることには注意をうながしておきたい。

「喧嘩」の首謀者は、「鳶の頭の息子、長吉」である。「喧嘩」の理由はいくつもあった。自分の組の年下のものが、昨年表組の連中にやられたということもあった。相手が「公立の小学校」に通うというだけで、同じ唱歌を歌っているのに向こうが「本家のような顔」をしているのもしゃくだった。それに若衆たちも表組には愛想がいいが、横町組には愛想がないというのも気に食わなかった。それというのも、表組の大将「田中家の正太郎(13歳)」は金貸しの息子で、その金貸しの恩恵を受ける連中が向こうの味方をしていたからである。そんなもろもろのことが許せなかつた。今年こそはなんとか仕返しをして、目に物を見せてやらなくては気が收まらなかつた。

理由はなんだってよかったのだ。一番年長の長吉にとって、状況を「くらべ」てみて不公平があるということは一目瞭然だつた。問題は、その鬱憤を晴らす方法が見つからないだけだつた。

ところが夏祭りの前に、いい方法があることに長吉は気がついた。それは「喧嘩」のことではなく、「喧嘩」の後押しに「龍華寺の息子、信如(15歳)」についてもらうというアイディアである。この秀才が横町組につけば、表組なんて怖くはないと思ったのである。このアイディアの意味するものは、この「喧嘩」が、単なる個人同士の恨みの買い合いからはじまっているものではなく、何かしらどんどん学問や金持ちのほうに向かう階層に対して、そこから取り残されていく自分たちの階層の恨みやいらだちをどこかにぶつける機会を求めるものだつた、ということなのである。

ところで『たけくらべ』のなかでもっとも魅力的で、かつ悩み深き子どもとして描かれているのは、言うまでもなく「大黒家の美登利(14歳)」である。彼女は和歌山から女郎に売られる姉と一緒に吉原にやってきて、大黒家の寮に住まわせて貰い、そこから私立の学校に通っている。けれども持ち前の器量好いで、まわりからちやほやされ、小遣いなど貰ったりするものだから、それを友だちに気前良くばらまいて姉さん風を吹かしていた。そんな風だから、夏祭りまでは、まわりからいろいろと言われても、まだ「現実」がわからないところがあつた。そんな美登利があの夏祭りの時、横町組の長吉から、額に泥草履を投げつけられ「女郎め」と言われ、そのときはじめて何かを感じたのである。何か違う世界のあることを実感したのである。その日から彼女は学校は行かなくなってしまった。いかにちやほやされ、銀貨の入った財布を持ち歩いていても、子どもはいざとなるとこのよそ者の彼女を「女郎」と蔑むことは忘れなかつた。そしてこの「喧嘩」を境に、美登利は自分が「娘」と「女郎」の「二股」を生きなければならないことを現実に意識するようになるのである。

この美登利が密かに恋心を抱くのが、横町組の後ろ盾にされた「龍華寺の息子、信如(15歳)」である。彼はまんまと長吉

の口車にのせられ、知らず知らずのうちに喧嘩の後ろ盾にされたのだが、この信如も、自分の親である住職が町に茶屋を出し、姉にその店番をさせていることや、夜店で母にかんざしを売らせたりして金儲けにあくせくしている姿を見て、たまらないものを感じていた。彼も「住職」と「出店」の「二股」の世界に気がついていた。しかし彼はまだその「二股」を踏むことに強い懸念を覚えていた。こういう態度は美登利に対しても見せていました。美登利が彼に恋心を抱いているように彼自身も美登利に好意を持っていたにもかかわらず、彼女が接近してくると逃げていた。「遊女」と「坊主」の「二股」に掛ける橋は見い出しあるもなかつたからである。

こうして夏が過ぎ、秋祭りの時がきた。しかしこの時は、この「子どもたち」の身の上にも大きな変化が訪れていた。横町組の大将長吉は、この秋にすでに遊郭の朝帰りを果たし、美登利もこの秋 14 歳で初潮を迎え、遊郭に遊女として参上する儀式を行っていた。同じ日、信如も遠くの寄宿舎のある学校へ旅立つてしまっていた。

一葉は、この物語で「子ども」の遊ぶ姿を描いたわけではない。「住む世界が違う」ことがわかった後から、子どもたちは二股を掛ける新しい生をはじめなければならなかつた。それはもはや「子ども」の生と呼べない次元のものである。その次元の切り替わる境目を一葉は描こうとしていたのではないか。